

農作物の盛衰

(のうさくもつのせいすい)



乾燥させた煙草を束ねる
作業（昭和 30 年代
石塚登一郎氏提供）

明治期・大正中期、川間村の主たる農作物は、陸稻（りくとう）・大豆・大麦・小麦・桑でした。このうち、桑は養蚕に使用され、川間村では養蚕業も盛んでした。しかし、大正 9（1920）年、繭（まゆ）の価格が暴落したため、川間村の多くの農家は桑を抜き捨て、桑園の跡地で煙草（たばこ）を栽培するようになりました。煙草の裏作として白菜が取り入れられ、川間村の農家は「煙草→白菜→大麦・小麦」という輪作パターンをとるようになりました。川間村阿部のある農家は、東葛飾郡農会の品評会への白菜の出品を目的として京都の種苗（しゅびょう）会社から白菜の優良種子を取り寄せ、白菜の栽培に励みました。また、川間村中里のある農家は、東京に出て印刷業に従事していた弟が青果市場の印刷物を扱っていたので、その弟から青果市場の印刷物を送ってもらい、白菜の有利さを理解するようになり白菜の栽培を開始しました。その後、この農家は村内の仲間に白菜栽培を奨励し、協同してトラック業者を雇い白菜の東京出荷を試みるようになりました。

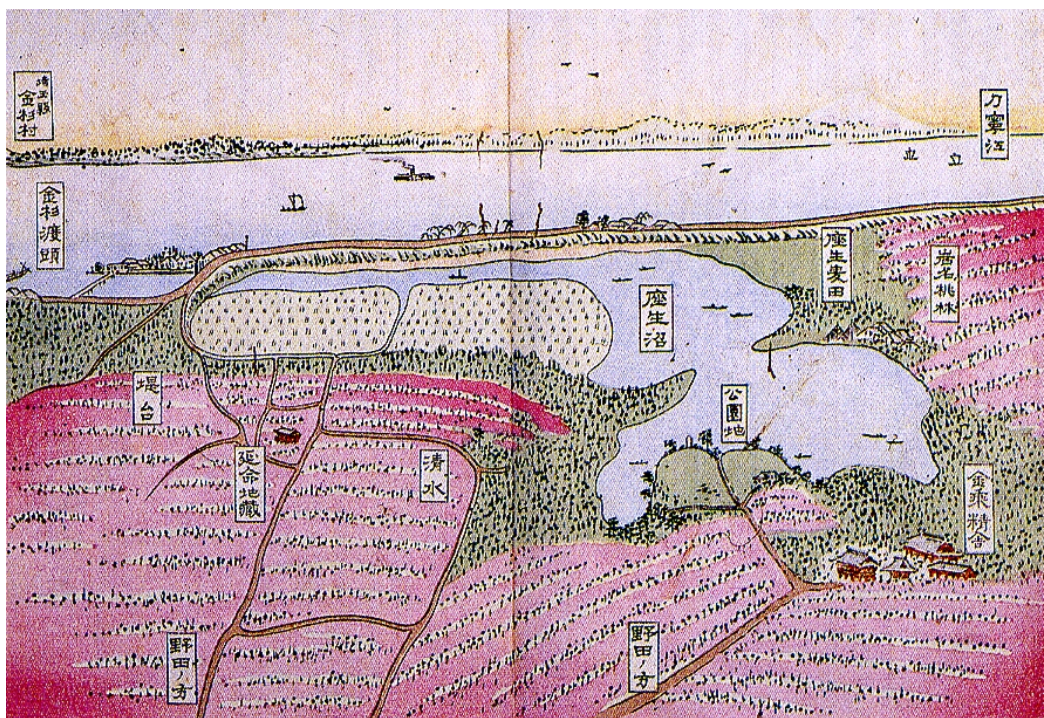
ところが、昭和 9 年（1934）頃、煙草は作葉（さくは）（桐ヶ作葉）から米葉（べいは）（米国葉）に転換し、これに伴い専売局の方針で、それまで天日乾燥ですんでいた煙草の葉の処理は、火力乾燥をしなければならなくなりました。これにより、夏の暑い時期、火力乾燥場に入って約 40 日間炎熱と戦う厳しい作業を農家はしいられることになりました。また、この時期は白菜作りの繁忙期に当り、このことは煙草作りと白菜作りはもはや両立しえないことを意味しました。そこで、煙草に代わる農作物として川間村の農家の一部に導入されたのが枝豆でした。それ以前、大豆作りが盛んであった経験を持つこの地域の地質は枝豆作りに適しており、「枝豆→白菜→大麦・小麦」という輪作パターンが成立しました。現在でも枝豆は野田市を代表する商品作物で、市のコミュニティバスも「まめバス」と命名されています。

果樹は、明治期、桃栽培が江戸川沿いで盛んでした。この地域は、桃花の名所としても知られていたようで、明治 26 年（1893）4 月に当地を訪れた東京のある文人の観賞記録が『野田観桃記』としてまとめられています。これには、座生沼（ざおうぬま）に浮かべた舟中から見た岩名桃林の眺めのすばらしさとともに「野田地方」の桃の収益の多さが記されています。大正期に他産地の新品種に押され気味になり桃生産は衰退したと考えられますが、東金野井の遠藤大治郎家に、桃が盛んに出荷されていた様子がわかる明治中後期の文書も残り、幻になってしまった桃生産の様子を知ることができます。

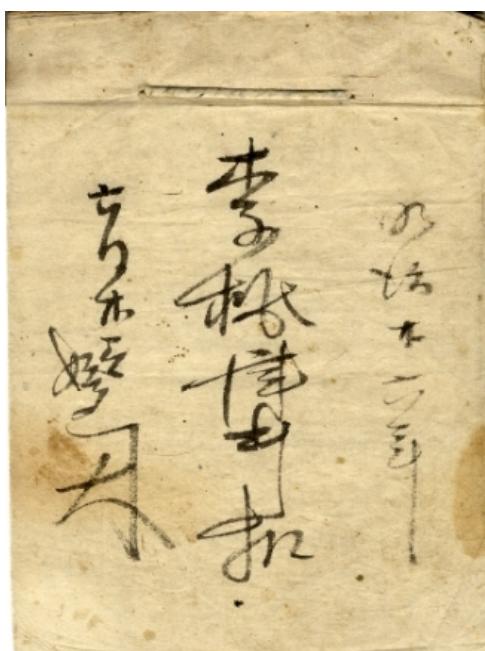
《詳しくは…》

* 小川浩他 1998「座談会 野田を語る⑦ たばこ作りあれこれ」『野田市史研究』第 9 号 野田市

『野田観桃記』 図の右上部に「岩名桃林」が記されている
(明治 28 年 興風図書館所蔵 部分)



桃の出荷を記録した「李桃津出控」
(明治 26 年 遠藤大治郎家文書)



旧川間村重要農産物品評会会場
(大正時代 染谷京子氏提供)



旧川間村農業共同組合青果物集荷所
(昭和 20 年代 染谷京子氏提供)

